2016/11/22 @月島

文責：長谷川新

ロベルト・エスポジト『人とものの』（未邦訳）

Roberto Esposito – Persons and Things (2014/2015)

序論

pp.1- pp.2

・ 私たちがものではないという確信=ものは人の反対だから

→自明に思えるこの考えは、実際には古代から現代にいたる長いプロセスの結果

・ ローマ法学者ガイウス（２c）『法学提要』:「人」と「もの」と「訴訟」を法の主題を構成する３カテゴリーとする

pp.2-pp.3

・ 人類学研究においては、人とものが同一の地平の一部をなしている社会が舞台の物語が報告されている

→人とものは互いに影響しあうだけでなく、実際に互いを補いあっている

pp.3-pp.4

・ 古代社会と現代の経験の間のこの相似は、それ自体、いかに痕跡を残さずに歴史から消えることができないかの証左であるとともに、ギリシア哲学、ローマ法、キリスト教の概念の合流地点を構成する現代の地平が、可能性の箱舟を掘り尽くしていないかを示してもいる

・ 私たちのテクノロジーから生じたオブジェクトが、それらを実用的にするノウハウとともに、ある種の主体的生を具現化すればするほど、私たちはオブジェクトを排他的に奴隷のような機能へ押し込めることができなくなっている

・ バイオテクノロジーの使用を通して、一度は個別のモナドとして生じた人々は、今や他者の身体や非有機的な物質に由来する諸要素へと、自分たちを収容しているかもしれない

→人間の身体はこうして、ますます二項論理に還元しづらい関係性の流路や操作者となってきた

pp.4-pp.5

・ **人のカテゴリーにも、もののカテゴリーにも該当することができないために、身体は恒久的な位置を見つけることができず、２つのカテゴリーを行ったり来たりし続けてきた**

pp.5-pp.6

・ person：「ペルソナという装置」は、それ自身を固有の割れ目から解放できていない

→古代ギリシア：仮面のようであり人間の身体と一致しない

→ローマ法：人間を示唆するというよりも、諸個人の社会的役割に言及するもの

→キリスト教の教義：身体的次元に還元できない精神的核のなかに住まう

・ ビオスは様々な仕方で、異なった価値付けをされ、互いに他方に従属する２領域へと区分けされている

pp.6-7

・ その結果が、様々な時代において新たな形態へと再加工されてきた人間化と脱人間化の間の弁証法である

・ 人間は合理性と動物性の混合物であると考えられていることは驚くに値しない

・ **全ての世代の人間たちが、他の人間の身体を彼らの意志に完全に役立つようにする以外の手段で、他の人間をもののステータスへと還元することはどのように可能であったのか？**

pp.7-pp.9

・ **人間の脱人間化の過程が、ものの現実感消失の過程と一致している**

・ 人とものとの結びつきの重要性を理解する上で、私たち統合と分割の間の逆説的な交差を見落としてはいけない

・ プラトンとアリストテレスのどちらのケースにおいても、ものは単一の実存へと一致せず、むしろそれを超え出た本質から宙づりにされている

・ 「もの」を「客体」へと還元する現代的な事象の結果として生じた「存在」と「無」の間の含意は、ハイデガーがニヒリズムと呼んだものである

pp.9-pp.10

・言語はその現実の存在を否定することによってしか、すなわちそのものを非物質的な平面に載せることでしか、そのものを「言う」ことができない

pp.10-11

・ **ものと人の間の形而上学的結び目を解く唯一の手段は、身体の視点からアプローチすることである**

・ 「身体＝私たちの個人的経験と集合的経験が統合される唯一の地点」とすることに狙いを定める関係性

pp.11-pp.12

・ 身体はガイウスによって分割された人とものの間の関係性を再構築するだけでなく、究極的にものをくり抜いている res から obiectum への現代の通路を逆行して捉え直す

・ 現象学

→ペルソナという装置を分離することによって生産されるロゴスとビオスの間の人間の割れ目を埋める

→単一のものとしての特性を、交換可能なオブジェクトに取り戻す

- アンソロポテクノロジー（ペーター・スローダイク）：私たち自身を変えることができるという私たちの能力

pp.12-pp13

- 人体が持つ政治的機能＝今日において完全に中心的なもの
- 生政治
  →近代において、個人は「法の主体」という形式的観念へと制限されたが、今や個人は彼あるいは彼女の身体的次元に一致する傾向にある
  →人口は、その全ての面において生物学的生を含む必要性、欲望、欲求を構成する肉体性との前例のない関係性へと入り込んだ

pp.13-pp.14

- people：ペルソナという装置同様、該当しなければ排除や周縁化に晒される領域を含む
  →国家と一致する一形態における市民の全体性
  →デモス（サバルタンを含む）、庶民
- 西洋史＝どの人々のなかにも存在している「２種類」の people と同時に結合したり分離したりする周縁の周りを回っている
  →王の二つの身体、王と国民、君主制と代議制など
  →今日、生政治的体制においては、身体があらゆる重要な政治的動態へ入り込むことによって、この不一致はますます疑わしいものにされている

pp.14-pp.15

- 現在地球上の多くの公共圏を満たしている抵抗運動の再来のなかで私たちが見ているのは、階級的、現代的制限を超えた民主主義制度の不可避的拡大である
- こうした出来事によって私たちが行動するように求められている課題は、もっとも弱い部分を従属させることによって世界を統合してきた太古からの政治-技術的機械を機能不全にすることである
- 現在の私たちの政治形態に現実的な変化を起こすためには、私たちの解釈上の概念を深く変更することを等しくすることなしには想像不可能